

人間の心に不可欠なビタミン

1. 教育を考える一言

教育は「愛」です。「愛」の反意語は「無関心」及び「冷淡」です。

2. 背景

私はウクライナから来ました。日本に来る前に、教育大学を卒業し、同じ教育大学や学校（小・中・高校一環学校）に教員として勤めました。2007年に文部科学省の外国人教員研修プログラムで日本の大学で研究できる機会を利用して、筑波大学で研究をさせていただきました。1年間半のプログラムが終わって、私は筑波大学の大学院に入学できました。専門は教育学です。同時に国際理解支援協会の「留学生が先生！」という教育プログラムで、一ヶ月に1・2回ぐらい東京、埼玉県、千葉県にあるさまざまな教育機関で自分の国を紹介する出講をやっています。

筑波大学の博士前期課程に入って、様々な講義を受講しました。ひとつの授業で先生から、教育に不可欠なビタミンとは何かという質問がありました。この授業は、筑波大学副学長であり、私の指導教授でもある清水一彦先生が担当されている「教育制度学演習」でした。質問の答えは簡単ですが、どうしてか私たち学生は誰もすぐには答えられませんでした。

3. 考察

教育に不可欠なビタミンはビタミンI（愛）であり、人間の心にも不可欠なものです。「愛」の反意語は「嫌悪」ではなく、「無関心」です。初めてその言葉を聞いて私はびっくりしました。とても簡単な言葉で、とても当たり前のものですが、どうしてか誰もすぐには考えつきません。教員が自分の生徒に無関心であれば、それは大きな問題です。このような教員の態度は、残念ながら今日でも時折見られます。どこの国でも、どこの教育機関でも、教員の生徒たちへの無関心は大変な結果につながります。

私は母国の大学ではじめて教育学を勉強したとき、スホムリンスキーの『教育の仕事—まごころを子どもたちに捧げる』を読みました。スホムリンスキーはウクライナ、旧ソ連の有名な教育者で、教員や校長の深い経験があります。その人が書いた本は日本語を含めて、様々な言葉に訳されています。『教育の仕事—まごころを子どもたちに捧げる』ではスホムリンスキーは以下のように述べています。「授業中しか生徒に会わない教員、そして生徒から机の反対側にしかいない教員は、生徒の心がわかりません。子供である生徒がわからない者、その子の考え、感情および切望を受けいられない者は教員ではありません。」

参考文献

スホムリンスキー、笹尾道子訳『教育の仕事—まごころを子どもたちに捧げる』新読書社、1987年